



## ただなが 忠長公と駿府の盛衰

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなかり



家康公が大御所として駿府城に居られた十年間、駿府は日本の外交の中心地でした。京都、大坂、江戸と並んで人口十万を超える、日本を代表する大都市で、今川時代から受け継いだ文化が開花していました。

家康公の没後、その遺産は将軍家と義直公、頼宣公、頼房公の御三家に分けられ、頼宣公が駿府城主となりました。しかし三年後、頼宣公は和歌山城主となったため、駿府城は幕府直轄の番城となりました。

その後、寛永元年(一六二四)に、三代将軍・家光公の弟君である忠長公が五十五万石の大名として駿府城主となり、官位も従二位権大納言となり、駿河大納言と呼ばれました。駿河大納言がずっと駿府城におられて、御子孫ができて、江戸時代を通じて駿河徳川家が

続いているならば、駿府のまちは、尾張や加賀に匹敵する大都市として発展したと思います。

残念なことに駿河大納言は、気の強い母に育てられたとか、兄の家光公と仲がよろしくなかったとか、いろいろな問題がありました。寛永八年に駿河の地から追放されて、最期は高崎の大信寺で自決されました。

それからの駿府は、人口二万の天領です。東海道の中の平和な商業のまち、庶民のまちになりました。家康公ゆかりの地で、久能山東照宮があり、位の高いまちですから、お奉行様がいて、静かにきちっとまちが守られて、街道筋としては繁栄しました。

江戸時代に大きくなったまちは、殿様がいて、自分の藩をなんとか繁栄させようというモチベーションがありました。前田家や尾張家が

には、8千とか1万の御武家様がおられました。御武家様は、政事を行う方々ですから、モノを消費する力が進み、商業が発展し、人口十万を超える大都市になりました。

幕末になつて、將軍家を下りた徳川家は駿府に入り、私の曾祖父で当時六歳の家達君が七十万石の駿府藩主となりました。駿府の皆様は、江戸から移住してきた数万人の幕臣たちを、温かく迎えてくださいました。

ただ駿府七十万石では、幕府六百万石の幕臣たちを賄いきれず、藩の仕事につけない方が大量に出てきました。そこで、幕臣たちは、地元の方々と一緒に、牧之原の開拓をはじめ、今日の静岡の商工業のもとになるいろいろな産業を育て、新しい静岡の活力を生み出していきました。

山水釣人蒔絵提重(清見寺所蔵)。縦17.3cm×横33.9cm×28.6cm。重亀甲形提銀附の枠内に、重箱、酒器、六角形盆、盃を納めた花見弁当形式の提重。枠の天板に苔屋に釣人・柳・楼閣山水を描いている。駿河大納言が所用し、清見寺に寄附したものである。

